キャンドルの輝きを体験しよう

冬の夜空に輝くスノーキャンドルやアイスキャンドルは、今では北海道の各地で作られ、その地を訪れる人の目を楽しませています。小樽運河では、毎年「小樽雪あかりの路」という名称で実施しています。幻想的な光景が観光客に人気です。

小学校でもキャンドルをつくる活動が行われています。ここでは、手軽なキャンドルの作り方や生活科での活動のポイントについて紹介します。

ここがポイント

キャンドルをバケツでつくる

教室にあるプラスチックバケツで手軽にアイスキャンドルやスノーキャンドルができます。

作る際のポイントは次の通りです。

①氷点下が続く日に作る

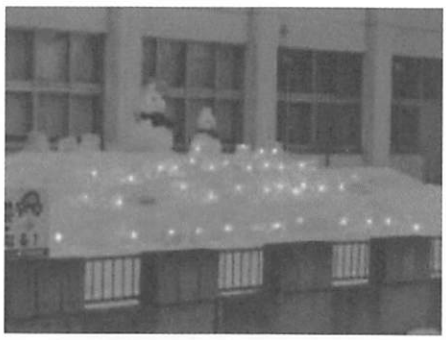
→バケツに水を入れて、屋外の日陰に放置します。氷点下になるとバケツの外側から順に凍っていきます。天気予報を見て、氷点下が続く日をねらいましょう。

②バケツの真ん中に筒状の芯を入れておく

→アイスキャンドルはバケツの中が凍る状態を見て、全体が凍る前に逆さにして熱湯をかけます。すると、バケツから簡単にキャンドルが取り出せます。スノーキャンドルは、予め筒状のものを入れておきます。印刷機の芯をバケツの高さに合わせて切っておくとよいでしょう。芯をバケツに入れ、その周りに雪を詰めます。あとはアイスキャンドルと同じ工程です。

③飾る場所を選ぶ

→できれば積雪があり、小山のようになった場所がおすすめです。ろうそくが灯った時に地面よりもきれいです。踏み固めたり、通路を作ったりしておくとよいでしょう。



また、写真のように雪玉を積み重ねて作ったり、氷板（外靴のトレーを凍らせて作ります）を立てて作ったりするキャンドルもあります。いろいろ教えると、子どもは意欲的に「自分たちのキャンドル・ランド」を作り始めます。

雪を使った遊びの一つとして、屋外で運動する機会づくりとして、１年生、２年生ともに可能な活動です。生活科の冬の単元に位置付けてみてはいかがですか。

Active

キャンドルは一人一つ作成することもできますが、バケツがたくさん必要になります。数人のグループで作成するとよいでしょう。

スノーキャンドルは彩色をすることも可能です。彩色には絵の具やポスターカラーを使います。どんな色やイラストを使うか、楽しい対話が生まれます。必ず終わった後の周りの環境（汚れ）にも配慮します。

点灯するときは、必ず教師が火器を扱います。子どもは、置く場所や風向きを考える時にアクティブに活動します。

気付き！

冬の屋外での遊びや制作活動は、雪像作りもそうですが、天候や気温、風向きと関連があることに気付きます。教師は、活動した後に子どもが表現（発言や記録カード）するとき、意識して取り上げたり、気付きを価値付けて他の子どもに広げたりします。そうした関わりが深い学びへとつながります。

あるある NG!

夕方にキャンドルに点灯する活動を考えるなら、必ず校内に周知するとともに、事前に保護者にも日程や集まる場所のお知らせをします。放課後の活動になるので、下校を含めた安全を守るため、学校で一緒に参加できる保護者を把握するとよいでしょう。

キャンドル制作は手軽にできますが、ろうそくだけは教師が用意しなければなりません。屋外で点火してみて簡単に火が消えるろうそくを使うと、子どもはがっかりしてしまいます。太めで芯がしっかりしたろうそくを用意します。長時間点灯しないので、一本のろうそくを輪切りにすることで、多くのろうそくを用意することができます。教師が切る際は、ケガに注意しましょう。